

銀の皿

「意思の疎通」



今日もジョン君の話です。首輪にリードを付け、シャロン館の門扉を開けて散歩に出かけました。彼は競馬場で走るお馬さんのようにフガフガ言いながら外へ駆け出します。散歩がうれしくて仕方が無いのだと思います。途中、ある家の庭から綺麗な花が咲き並んでいました。思わず私はジョン君に「綺麗な花だねジョン君」と話しかけましたが彼は夢中で地面を嗅ぎまわり聞く耳を持っていませんでした。そんな楽しい散歩タイムが終わり、シャロン館の門扉をしめて外に出ていく時、ジョン君の耳と尻尾が垂れ下がり、今までフガフガ言っていたのが嘘のようにシヨンボリします。これは気のせいですが、なんか目尻も垂れ下がって「えー帰るん？」って顔をして見つめてきます。あの姿を見ているともう少し居てあげたい気持ちになりますが、こちらも他の仕事がありそういうわけには行きません。言葉も通じませんし、犬は人と違い思考(感情はあっても)することが出来ません。なので仕方がない事でもあります。改めて意思の疎通って難しい事だと思ってしまいました。

世の中に於いて、人と人との意思の疎通と言うものは時間がかかる場合もありますし、ある意味で面倒な事です。自分が思っているように物事が相手に伝わっているとは限らないし、又相手の思っているように自分がそれを受け止める事が出来ているとは限りません。そういうじれったさが繰り返されて、コミュニケーションを取ることを止めてしまう時があります。しかし私達が聖書から学ぶ「繋がり」というのは条件や状況で変わるものではあ

りません。ずっとそこに在るものです。そしてそれはこれからも変わることがありません。そしてそれに気づかせてくれたのがイエス様の命がけの愛です。無条件の愛と尊い代価が私達に神と人との「繋がり」を取り戻す力のみなもとになったのです。

思いがけず、良く散歩のときに真理に導かれる事があります。「あなたが祈りに十分に腰をおろせないのは、私に従いたくないからだろう？」ぐうの音も出ない神様からの言葉でした。どこかで深い心の奥で自らの声に従って周りをコントロールしたい。それは人間の持つ誘惑と欲求ですが、聖霊様によらなければ謙遜に生きる事が出来ない。しかも聖書が語るには「御霊によって歩みなさい」(ガラテヤ 5:16)です。誠実に自分の考えを打ち明ける事も、他者に耳を傾ける事も、そして手と手を取り合って協力することもすべて御霊の力によるものです。そんなことを教えられる折になりました。年末から、2020年、さらに祈りの年にしたいと願っています。共に御霊によって結び合わせられ、前進するものとなりましょう。

